



「ひきこもり」について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学教育学部旭川校特殊教育特別専攻科障害 児教育研究室 公開日: 2017-07-27 キーワード: 作成者: 大谷, 裕香里 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008029

「ひきこもり」について

A Case of Withdrawal in an Autistic Adolescent

大谷 裕香里 (Yukari Ohtani) *

共同作業所に通所する自閉症青年の「ひきこもり」の姿を述べその意味について反省し、大人
人の感受性を高めることの大切さを検討した。

(キーワード：ひきこもり 自閉症 青年期 感受性)

1. はじめに

この年(1998年)夏、東北障害児療育教育研究会に参加する機会を得た。その中で、佐藤則昭先生(山形大学付属高等養護学校)が何例かの「ひきこもり」の事例について語られた。

中学部までは、それなりに先生の指示にも従い、積極的ではないにしろ、周りの状況に合わせていた人たちが、高等部に入りその姿を一変させ、教室に入ることを拒否し一日を廊下で過ごすという状況をビデオで見せられた。その姿を見ながら、ウレシパ共同作業所に来ているタカヒロ君とだぶらせている自分に気がついた。

2. ウレシパ作業所に来るようになった理由

タカヒロ君は現在20才。中学部までは近くの学校の情緒学級に通っていた。自閉症である。お母さんの話によれば、小さい時からほとんど手がかからず、親の言うことにも素直に従っていた。中学校を卒業すると施設入所をするようになり、親元を離れた生活が始まる。

それからは、施設の中での破壊行為が始まり、トイレ、ドアなどを壊すようになった。施設でも対応に苦慮されるようになる。家に帰省すると、施設に戻ることを拒否するようになり、施設を退所する頃には、ほとんど家庭で過ごしていたようである。

施設適応が困難なため1年で退所し、施設長からの依頼もあり、ウレシパへ通所するようになる。

3. ウレシパに通所して

ウレシパに通所を始めた頃は、最も状態の悪い頃で、送迎の車の中では、窓からゴミを捨てたり、他の所員さんの頭に唾を塗りたくったりとじっとして座っていることはなく、運転をしている職員が注意をしても、一向にお構いなく、無法地帯の主のようでした。また、発作が頻繁に起こるようになり目が離せない状態でもあった。

家庭でも作業所でも、八つ当たり的な破壊行為が多くあり、泣き喚いて作業所の周囲を走り回ったり、突発的な行動も多く見られた。その頃の出来事の一つとして、ウレシパ日誌・第7話「地域医療に支えられて」(資料①)に書かれているようなこともあった。

ウレシパでは、アルミ缶のリングプルを10個くらい取ってもらったり、牛乳パックの底を5個くらい切ってもらったりするのだが、本人にとってはそういうことが納得のいくものではなく、「イヤイヤながらにさせられた」と思うようで、台所に走って行っては、テーブルをひっくり返して脚を折ってしまったり、トイレに走って行っては扉を蹴破ぶったりすることがたびたびであった。そういう意味では、受け入れの

* ウレシパ共同作業所

幅がまだかなり狭く、自分の気持を言葉で表現することも出来ず、こちらもつつい『やらせ』になってしまうことが多かった。今まで反発も許されず、大人達の言われるままに従順にやってきたことに対して、「させられること」に対する抵抗として、このような形で自分なりの表現をしたように見えた。

そんな時、朝の挨拶の時間に、「今日は何するの？」の問いかけに、「しない」と応えた。それがウレシパ日誌・第5話「しない」(資料②)で紹介されている。それからはタカヒロ君の意向を十分に汲み取り、タカヒロ君の生活にこちら側が付き合うようにしてきた。

4. タカヒロ君との付き合いを通して

タカヒロ君は発作が激しくなり、のぞみ学園に入院させてもらうことになった。最近、頻繁にあった発作も、薬の調整でかなり減ってきた。日中をウレシパで過ごし、夜はのぞみ学園、そして週末は家庭で過ごすというような生活が始まった。本人は、のぞみ学園の入院を本意としている訳ではないが、家庭での生活を維持するには必要なことであった。それはのぞみ学園の理解があって、ウレシパとそれぞれの役割を荷いながらの家庭生活の支援にほかならなかった。

タカヒロ君の一日の過ごし方は、本人自身が決めるようになり、行動的にも精神的にもずいぶん落ち着いてきた。以前なら時間を決めていた買い物も、作業所に到着するとすぐに財布を持って行くようになった。それがウレシパに来る一番の楽しみであるように見える。朝食を食べて来ないということもあるようだが、私自身には、いろいろなストレスを発散させるために、気分転換を図っているように見える。初めの頃の買い物では、お金があっても無くても買いたくだけ買って来たり、一日に何度も買い物に行くようなこともあった。母親からはお金の使いすぎだから何とかしてもらえないかと言われたこともあった。タカヒロ君の出すさまざまな行

動も心の表現として受け止め、タカヒロ君の納得できる形ですすめようと母親には理解をしていただいた。

買い物の仕方にも、少しずつ変化が現れ、お金が無ければ取りに戻ることができる日もあれば、少しの買い物をしただけで納得のできる日もあるようになってきた。

これらのエピソードはウレシパ日誌を参照していただきたい。

第14話「ママ クル」(資料③)

第24話「生活者」(資料④)

第28話「回り道」(資料⑤)

第30話「関係の中での自己調整」(資料⑥)

第34話「小さい買い物」(資料⑦)

第40話「タカちゃんの心配」(資料⑧)

第52話「価値」(資料⑨)

5. また一つの作業所での過ごし方

のぞみ学園に入院してから、しばらくして昼食も取らず一日を布団の中で過ごすことが多くなった。初めの頃は、学園で、夜、眠れないのかもしれないと思っていた。確かにそういうこともあるのだろうが、最近はどうもそればかりとも言えないように思えてきた。布団の中で過ごすことはタカヒロ君にとっての逃げ場所のように見える。本人にとっての『ひきこもり』の場所のように見えてくる。多くは、作業所に到着してすぐに布団に入るか、買い物に行った後、布団の中に入って一日を寝て過ごす。本当に眠っているときもあれば、じっと聞き耳をたてているときもある。しかし、気分的に調子の良い時や、まだ所員さんが誰も来ていない時にはひとりで起きて遊んでいるし、活発に動き回っている。そんなに楽しく遊んでいても、みんなが来ると押し入れの中に入ってしまう。どこかに所員や職員との関わりを避けているようなところが見られる。家庭から来るときよりも、のぞみ学園から来るときの方がずっと布団の中で過ごすことが多い。

布団の中でばかり一日を過ごしているので、

起き出してくれないかと本人の興味のあることで誘いかけるのだが、こちらの誘いかけには一切応じてくれない。「イヤ」「しない」の言葉で拒否されてしまう。大人の言うことに「いいことはない」といった感じで、信用さえしてくれなくなっている。大好きな買い物やプール遊びでさえ、こちらが誘いかけると頑強に拒否をする。そのため、今はタカヒロ君の気持を揺さぶるようなことは避けて、決定権はすべてタカヒロ君にまかせている。タカヒロ君が自発的に出す言葉や行動のちょっとしたところで、何か気持が通じ合えたり、やりとりができないものかと考えている。タカヒロ君の思いを受け止めることから、コミュニケーションが生まれ、関わる私たちがタカヒロ君の意にそわないことはしないということで、タカヒロ君との信頼回復ができないものかと願っている。

そういうちょっとしたタカヒロ君とのやりとりはウレシパ日誌を参照していただきたい。

第15話「嬉しい気分」(資料⑩)

第27話「ワイパーで結ぶ会話」(資料⑪)

第33話「タカちゃんの納得」(資料⑫)

第48話「タカちゃん、コックさんになる」
(資料⑬)

6. ひきこもりについて

最近のタカヒロ君は自傷行為をかなり頻繁に起こすようになってきた。布団を敷いて寝るのも押入れの中で、襖を閉めて「ひきこもり」はかなり強くなってきた。タカヒロ君はいろいろなことがよく分かっていて、生活力もかなりある。だから外にむかう破壊行為のようなものが

少なくなった分だけ、逆に、内に向かう自傷行為のような形で自分の意思を表現しているようなところが見られる。布団の中に入ってじっと聞き耳をたて、自分にとって不都合なことがあったり、なんとなく状況的に困りそうだと予測がついて、自傷行為にかりたてられているようなところが見られる。

今まで他者から言われることをほとんど従順に聞いてきたタカヒロ君は、逆に自分を出す機会を経験して来なかったように見える。自分の買って来たものを、他の人に取られたりしても取り返しにも行かない。自分の納得のいかないことを言葉や態度で表現できない。

今、大人達の一方的な指示や教育に対して、『ひきこもり』という姿で自分の意思を表現し、怒りをもって抵抗し、不信感を表しているように見える。

そういう意味では、大人達の一方的な関わり方(教育、しつけ)というものに対して、タカヒロ君から「それでいいのか?」と問われているように思われる。タカヒロ君の日常見せる些細な行動を大事にしながらタカヒロ君の表出を支え、いろいろな躓きを経験しながら、私たち大人の Sensibility をいかに鍛えていくか、それこそ、私たちの課題を超えることでタカヒロ君の新しい姿に接することができるのではないかと考えている。そのようなことを、ウレシパ日誌から汲み取っていただければ幸いである。

第43話「ワイパーからウインカーへ」

(資料⑭)

第54話「非常識」(資料⑮)

第59話「Sensibility」(資料⑯)

ウレシパ日誌

地域医療に支えられて

ウレシパ日誌 第7話(資料①)

平成8年7月17日 水曜日

この日、朝、9時20分頃になっていたであろうか、いつもより10分程、遅れてタカヒロ君を迎えに行くべく自宅に伺った。

玄関に入ると、驚いたことにタカヒロ君は、顔は血に染め赤鬼のような形相で仁王立ちになっている。服のあちこちにも血が付着し、傷口をふさぐタオルは真っ赤であった。

私も、いささかギョツとなった。

心の動揺を抑え、平生を装いながら、お母さんに事の成り行きについて伺った。私の迎えが遅れたことも原因の一つではなかったかと思われるのであるが、タカヒロ君が、突然、家から小学校に向かって走り出しガラス戸に体当たりしたというのだ。ガラスは割れ、顔や手に傷を負ったというのであった。幸い、近くに児童はいなく、ガラスの破損とタカヒロ君の軽い傷で終わったということであった。

とにかく、タカヒロ君の傷の手当が先だ。居間に上がって傷の手当をし、顔や手の血を拭き取り、着替えをすませながら、この前後策についてお母さんと話し合うこととなった。

お母さんも、すっかり困られている。いい時は、いいのだが、今朝のように、一旦、事ある時は大変なのだ。

タカヒロ君は、この私など小さくてかすんでしまうほどの巨漢である。身長175cm、体重85.5kgの堂々たる体格である。

外から見ると、瀟洒で、素敵に見えるタカヒロ君の家であるが、一旦、内に入るや、壁や天井に、破損修理の後が見え、蛍光灯の素敵のカバーにもひびが入っていた。この前も、買ったばかりのテレビを壊されたとおっしゃっていた。大きいだけに、その影響はすごいのである。

最近、ウレシパに来ている時にも、突然、不機嫌になって、泣きわめいたり、散歩途中で、発作があつて倒れ、額に傷したこともあった。

家でもチック様の所作があつたり、原因不明の不機嫌な状態になることが頻回にあることもあり、静療院のDr.、のぞみ学園に電話で相談。緊急入院の処置を執っていただき、医学的な検索も同時にお願いすることとなった。

タカヒロ君や家族の生活を支える地域医療のありがたさとその必要性をこの時ぐらい実感したことはなかった。

(文責 高橋 渉)

“ し な い ”

ウレシパ日誌 第5話 (資料②)

平成8年6月19日 水曜日

車で迎えに行き戻ると、10時を過ぎる。みんな、揃ったところで朝の会が始まる。

「おはようございます。」

という朝の挨拶から始まって、それから、少人数ながらも出席の確認がなされ、日付け、天気の確認の後、今日の予定に入る。そこでは、今日、自分でしたいことを述べることになっている。

「今日は、何をやるの？」

という大谷さんの問いかけに答えて、この日タカオ君は無言であった。

それも、タカオ君の表現として、大事に受け止められる。ヒロユキ君は

「箱の整理をします。あとは、ワープロを打ちます。」

と言う。彼は、ウレシパの作業主任である。私もヒロユキ君の指示で働く。だから、私も今日は、箱を分解し、整理する作業をしなければならないのであった。その次は、タカヒロ君であったが、そのタカヒロ君が、

「しない」

と、はっきりと答えたのであった。こんなことは、はじめてであった。今までは、

「カンつぶし します。」

などと、一応、答えていた。

しかし、その状態は、自分から自発的にしようというものではなく、促されて渋々、しかも、申し訳程度に、ほんのちょっと、するくらいであった。そのタカヒロ君が、

「しない。」

と、はっきりと答えたのだ。これは、事件である。従来は、口先だけでも「〇〇します。」と、大人に合わせていた。大人の方も、それでホッと安心している節もあったのだが、それは、タカヒロ君なりの処世の術であり、生きていくための苦心の策であった。

そのタカヒロ君が「しない。」と、はっきり言いきったのである。そのことを、どう受け止めるか。人によって様々であると思うが、私たちは、入所して以来、1年経って、やっと自分の本音を出せるようになったのだと喜んでいる。

これからタカヒロ君がどんな姿を見せるか、大いなる期待とちょっとした不安と複雑にない交ぜ合った気持ちでタカヒロ君の今後を見守りたいと思っている。

(文責、高橋 渉)

「マ マ ク ル」

ウレシパ日誌 第14話(資料③)

平成8年10月30日 水曜日

この日、私は、9時頃、タカヒロ君を迎えにのぞみ学園に赴いた。

のぞみ学園に隣接するのぞみ分校は、この3月まで私のいた学校であり、体育館は、この1月に完成したばかりの思い出尽きることのないところでもある。

秋の深まりを感じさせる外で待っていると、タカヒロ君は武田先生に付き添われて出てきた。早速、私の車、スズキのジムニーに乗り込んだ。

どうも表情が悪い。そんな印象を武田先生にお話した。

入園当初は、あの大食漢のタカヒロ君が食事をとれないという時期もあったり、衝動的に粗雑な行動に出たりと、落ち着かない様子も見られていたが、それも収まり、一応、安定した生活を送っているということであった。

ウレシパに向かう車の中もおとなしい。以前だと、ワイパーのスイッチをまわしたり、時には、ギアに手を伸ばしてきたりすることもあったのだが、すっかりおとなしくなったという印象であった。

ところが、ウレシパにつき、しばらくすると、表情はゆるみ、笑顔も出てきた。そんな変化を志水さんと話していると、何日か前に、のぞみ学園に入った実習生の方を武田さんが案内して見学に来られた時、実習生の方がタカヒロ君の笑顔を見て「のぞみ学園ではみられない表情」と言われたという。

この日、山田商店から買ってきたポテトチップスを食べながら

「ママ、クル」

と、ふとタカヒロ君の口から出た。

一瞬、私は、ことばに詰まった。「ママ、クル」、それは「ママが、もうすぐ迎えにくるよ」という断定にも聞こえたし、「来て欲しい」という希望にも聞こえたり、「来るのかい」という質問とも受け取れるものであったが、ママに会いたいというタカヒロ君の心をはち切れんばかりに占領していた気持ちが口からポロッと洩れ出たという感じであった。

私は、一度、つばを飲み込んで、思い切って「タカヒロ君、今日はお母さんのお迎えはない日だよ」

とぶっきらぼうに言った。

タカヒロ君は、ポテトチップスを食べ続けており、表情の変化はなかった。

再び、私の車に乗ったタカヒロ君は、のぞみ学園に向かったが、その途中の路地を曲がると、タカヒロ君の家がある。その地点を通過する時、タカヒロ君は家の方に顔を向けていたが、それ以上の動きはなかった。

のぞみ学園が見えると、タカヒロ君は自らシートベルトを外し、車が止まると、さっさと降りて、のぞみ学園の中に姿を消した。

親元を離れ、入園生活を続けるタカヒロ君の切ない心の内を見せられたように思えたし、また、その新たな状況に影響されたり、合わせたりするタカヒロ君の自己調整の姿が健気にも思えた。

後日談になるが、その週の金曜日は、はれて外泊の日。ウレシパが終わって、自宅に送っていくと、車から降りたタカヒロ君は後ろも見ずスタスタと一直線に玄関に入ってしまった。(註)入園の事情はウレシパ日誌・第7話に紹介されている。

(文責、高橋 渉)

生活者

ウレシパ日誌 第24話(資料④)

平成9年4月25日 金曜日

朝、9時半頃、のぞみ学園にタカヒロ君を迎えに行った。出てきたタカヒロ君の表情は起きたばかりといったもので冴えない。タカヒロ君を伴って出てこられた看護婦さんも寝ていたのを起こしてきたとのお話であった。

ウレシパに着いたタカヒロ君は、早速、食べ残しのポテトチップスを出してきて食卓に置いた。更に、お皿にマヨネーズをたっぷり盛った。ポテトチップスにそのマヨネーズを付けて食べ始めたのであった。ところが、マヨネーズが足りなくなった。タカヒロ君はマヨネーズの容器を包丁で半分に分けて、容器の内側に着いているマヨネーズを掻き出して食べ始めた。

私などは、とても発想もできないような工夫を凝らした食べ方である。私よりはるかに生活力があるという感じなのだ。自分の必要を満たすために私などの常識をはるかに越えた方法を編み出して自分の生活を整えているとも言える。

私は、その逞しさに、むしろ感心してことの成り行きを見守っていた。

やおらタカヒロ君は、帽子をかぶり、財布をもって外に出た。私も一緒に行くと高木商店に向かって歩き始めた。春の心地よい陽光をいっぱい浴びながら一緒に歩く私の肩に手を回しての堂々の買物行である。

高木商店に着くと、私の予想通り、マヨネーズをまっさきに求めた。そして、先ほどから食べていたポテトチップス、そしてソーセージを手にしてカウンターへ。1221円であったが、開けた財布には、レシートが1枚入っているだけで1銭も入っていなかった。私の年金で立て替える羽目となった。

ウレシパに帰ってくると、早速、食べていたが、満腹となったのか、布団を敷き熟睡。お昼の弁当も食べずに寝入っていた。夜、寝れなかったのかも知れない。午後2時になって、みんなで買い物に行ったが、ガムを2個買っただけであった。

好きなときに食べて、好きなときに寝て、勝手なことばかりしていると、常識人である私には、そう見えるのであるが、少し見方を変えると、タカヒロ君なりに1日を自分で創り上げていっていると言えるのではないか。

他に合わせるだけが人生ではない。自分の生活なり、人生があって、初めて周囲を受け入れ、相互的な交流の中で自分の生活、人生を豊かにしていけるのではないか。

この間のクッキーづくりでは、タカヒロ君が1番よく参加してくれた。お互いに認め合える交わりの中からお互いを受け入れる、そういう力量が培われていくのではないか。なによりもタカヒロ君が主体的な生活者なのである。

そのお手並み拝見というお付き合いから、徐々に私たちとタカヒロ君ならではの交わりを深め、広げ、育て、育ち合っていければと思うのである。

(文責 高橋 渉)

回り道

ウレシパ日誌 第28話(資料⑤)

平成9年7月2日 水曜日

ウレシパに着いて、私は車から荷物を降ろしていると、タカヒロ君が財布を片手に出てきた。最近では、恒例になった朝の買い物である。早速、車の方は後に回してお供つかまることになった。

ウレシパの入口にもなっている山田造園の門を出ると、道のたどり方がいつもと違う。通常は、

門を出て、すぐ左に行くと、山田商店。道路を横断して向こう側の歩道を歩くと、高木商店に向かうことになる。

今日は、門を出て、すぐの歩道を右に折れて歩き始めた。ラルズという大型店に行くのだなと、私は直感した。私にとっては、初めての所である。タカヒロ君の歩くのは、大股で歩くせいか、速い。私は、後からチョロチョロと着いていく羽目になった。近道も知っているのだ。感心して着いていくと、店に入るなり、籠を持った。慣れてるという感じだ。どんどん店の奥に入っていく。多くの種類の商品が置いてあり、たどる道は、突き当たっては曲がりど、結構、複雑なのだが、タカヒロ君の足取りは、目的に向かって一直線という感じなのだ。

間もなくして、ソーセージの置いてある棚に着いた。300何円かの特売中のソーセージを籠に入れた。私は、ちょっと不安になって財布を見せてもらう。とても買えそうにはない。それでタカヒロ君に

「これは買えないので安いのに替えよう」

と提案。良く分かってくれて、元の棚の所に戻り、安いソーセージに替えて動き出したが、また、別の所に高いソーセージがおいてあり、タカヒロ君は、また、自分の望み通りの高いソーセージに替えた。私は、困って、

「お金が足りなくて買えない。ウレシパに戻ってお金を持ってこよう」

と提案。すると、どうでしょう。そのソーセージを棚に戻して、キャラメル様のお菓子を一つ買っただけでウレシパに戻ったのであった。そして、大谷さんから1000円を借りて、再び、ラルズに急いだ。

私は、感激した。欲しいソーセージが目の前にあり、手を出し、手に触れているのに、一旦、手放し、棚の前から、今、来た道を引き返すことになるのだ。それはタカヒロ君の気持ちと全く正反対の行動をとることを意味する。その最も難しいことを承知してくれたのだ。私は、正直のところ、こんなにうまくいくとは思ってもいなかった。

これまでも、私の予想だにできなかったすばらしい力量を発揮して感動を与えてくれた子どもたちとの出会いがあったが、この場合も、同じ喜びの感情を与えてくれた。

状況を理解して、一旦、引く。状況を見て、方法を変える。常にベストを追求する子どもたちが次善の策を選択できるようになる時、生活の幅は確実に広がる。状況を挟んでタカヒロ君と私どもの間に多くの回り道が用意されるようになる時、お互いのコミュニケーションは、確実に豊かさを増し、好循環の季節を迎えることができるように思えるのだ。

(文責、高橋 渉)

関係の中での自己調整

ウレシパ日誌 第30話(資料⑥)

平成9年7月28日 月曜日

夏休みで自宅に帰れることが嬉しいのか、タカヒロ君は、朝から「ワハハ、ワハハ」と声高に笑っている。

私が仕事している横の椅子にケース君と座って、絵本を見たり、牛乳パックの切り取られた底を5~6片、わしづかみにして上から落下させて遊んでいる。

「カイモノ イク」

の訴えに、私は

「今、仕事の途中だから10分待ってね」

と、お願いする。タカヒロ君は、牛乳パックの底で遊びながら早く行きたいという気持ちを抑えているかのようだった。

いつもお世話になっている山田商店に行った。チーズおかき、6Pチーズ、赤いきつねをカゴに入れる。

「タカちゃん、それ全部食べたら、お弁当、入らなくなるから1つ返しておいで」

と言うと、すぐ、赤いきつねを棚に戻した。欲しくてカゴにまで入れた赤いきつねを我慢するタカ

ヒロ君に私は感心した。そして、少しくらい高くても気に入った服を買ってしまう自分を深く反省した。ウレシパに戻り、嬉しそうな顔をして食べ始めたタカちゃんに

「タカちゃん、1つちょうだい」

と、私が口を開けると、

「しょうがないなあ、太ってもいいのか」

といった様子で、ポンと口の中に入れてくれた。

午後になって、みんなで作業をしている時、チリンチリンと玄関の方から音がしたので行ってみると、タカちゃんの姿が見えない。私は、すぐ追いかけた。いつも行く公園を探してみたがいない。それで、もしかしたらと思って山田商店へ急いだ。

「タカちゃん、来ませんでしたか」

と尋ねると、たった今来て、赤いきつねを両手にいっぱい持って外に出ようとしたので

「お金を持って買いにおいで」

と言うと、元のところに戻し、帰っていったところだというのだ。そして店の奥さんは、私に

「タカちゃん、変わったわねえ。以前なら、そのまま持って帰ったと思うよ」

と言ってくれた。私は、とても嬉しくなった。

いつも買い物に行くとはいえ、店の奥さんからの注意を受け入れて行動したタカちゃんはすごいと思った。ウレシパに戻ってから、1人で外に出てはいけないと注意しようと思ったのだが、私は、逆に、うんとほめてあげたくなった。

これからのタカヒロ君が楽しみである。

(文責、長瀬美津紀)

小さい買い物

ウレシパ日誌 第34話・(資料⑦)

平成9年11月5日 水曜日

月1回、第4水曜日の午後、所員と私たちのかかわり合いについて検討が行われる。常勤職員は、勿論のこと、ボランティアの方々も参加される。

ボランティアの中には、宇賀村睦先生のように、長年、障害を持った方々の教育に携わり、特に、先生は、北海道の情緒障害教育の草分け的存在であり、その豊富な体験をウレシパの所員とのかかわりから生み出されてくる事実に重ねて、ご自分の体験を吟味され、あるべき教育の在り方、そして、障害のある子どもたちについての理解に磨きをかけていらっしゃる方もいる。また、一方では、全く経験のない若い長瀬さんのような方もいる。

しかし、それぞれの個性を生かした所員の方々との交わりには、それぞれの特徴が出ていて面白い。だから、その体験から生まれる率直な話が、また、面白いし、いい勉強になるのだ。

この日の話題の中で、

「タカちゃんの生活の仕方が変わってきたね」という話になった。

「この間、古新聞などの提供品をさっさと運んでくれたよ」

「買い物も、以前のようにごさっと買わなくなったね」

などと、話題が続いた。確かに、今も、ウレシパに来ると、買い物に出かけ、帰ってきてからは、食べて、寝るというスタイルではあるのだが、その随分、勝手と思われがちな生活をしながらも何か変化が起きているというのだ。

この間の水曜日も、のぞみ学園に送っていく時、タカちゃんの姿が見えない。慌てて探しているところ、山田商店にちゃっかりと一人で行って買い物をしてきたのであった。

タカちゃんが手にしていたのは、明治製菓の「パリっとポイフル」というキャラメル様の箱、ひとつだけであった。

車に乗ったタカちゃんは、それをポリポリ食べながらのぞみ学園に向かった。それにしても、車の中で、ちょっと軽く食べるお菓子、1個だけを、手にして車に乗ってくるなんて、ちょっと格好いいんじゃないのって思った。

状況によって小さな買い物をするタカちゃん言い換えると、そのようにタカちゃんの行動の単位が細かくなり、その使い分けも、柔軟なものに、安定したものになってきたということなのかなあ
と、パリポリ、パリポリと乾いた音を聞きながら思った。(文責、高橋 渉)

タカちゃんの心配

ウレシパ日誌 第40話(資料⑧)

平成9年12月3日 水曜日

珍しいことに、ウレシパに向かう車の中でカバンの中から2回も財布をとりだし、その中身を見ていた。

こんなことは、初めてであった。「財布をとりだして、何をしているのだろう」と思った。

ウレシパに着くと、早速、ラルズに小走りで向かった。小走りというのも、また、珍しい。「余程、お腹が空いているのかな」と思いながら後を追った。

ラルズでは、慣れた手つきでカール、ポテトチップス、ペットボトルをカゴの中に入れた。

私は、ちょっと不安になってきてタカちゃんに財布を見せてもらった。61円しか入っていない。

「タカちゃん、これでは買えない。元に戻して、もう1度、こよう」

と提案。すると、タカちゃんは、それぞれの品物を元のところに戻して、ウレシパに戻った。

タカちゃんがどうするか、私は、黙って見ていると、大谷さんに財布の中を開いて見せた。

「お金？」

と、大谷さんが尋ねると、

「オカネ」

と、タカちゃんは応えた。こういう要求の出し方も、初めてであった。再び、ラルズに戻ったタカちゃんは、先ほどと、同じ物を買った。

この話を、村山さんにすると、昨日のことを話してくれた。昨日も、お金が足りなくてガムなどの小さい買い物しかできなかった。そして、おつりは61円と手渡され、財布にしまった経緯があったというのだ。

「そうだったのか！」

それで、私の疑問は解けた。タカちゃんは、心配だったのだ。ウレシパに着いたら買物に行きたいと思った。だが、お金が足りるかどうかがかりで財布をとりだした。

買い物に行く時は、必ず、財布は持つようになった。そして、今は、金額の多少にも注意が向き、買えるか買えないか、そんな迷い、心配事も抱えるようになってきたというところなのではないだろうか。

タカちゃんのすこしずつ広がる関心の世界を見せてもらった気がした。

(文責、高橋 渉)

価値

ウレシパ日誌 第52話(資料⑨)

平成10年7月22日 水曜日

タカちゃんの財布が替わった。布製で洒落れている。紐をつけ首から下げると、お守りのようにも、ペンダントのような飾りにも見えてくる。タカちゃんは、体が大きいから大きい財布をつるして歩いていてもよく似合う。硬貨は、勿論のこと、お札もそのままの姿で収めることができる。

カバンから財布を取り出す時も、財布が大きいからすぐ目につく。

「タカちゃん、どこに行くの？」

「カイモノ」

といった具合にタカちゃんとのやりとりにも役立っている。この間、お金に縁のない大谷さんが、珍しいことにお金を数えていた。すると、タカちゃんが

「オカネ」

と、お札の方に手を出した。

お札を財布に入れたタカちゃんは、早速、近くの山田商店に出かけた。店の中を見て回っていたが、何一つ買わずに店を出た。私も、慌てて後を追ったが、今度は、少し離れた高木商店に向かった。そこでカールともう一つのスナック菓子を求めて帰ってきた。この買い方にも、思わず、唸った。

タカちゃんは、毎日のように買い物に行く。その体験から硬貨よりお札に価値があることを悟ったらしい。タカちゃんの行動に、また一つ、選択の方向性が生まれ、秩序ができた。

タカちゃんが選び取る〈買い物〉体験から、〈買い物にはお金が必要〉とお金の価値を見出し、買い物には、必ず財布をもつようになった。欲しい物を買物籠に入れてレジに向かい混んでいる時など、人の少ないところを選んで支払いを済ませる智慧も発揮する。そのレジでお金が足りない時には、一つ、二つの品を返すことがあったり、また、レジに品物を置いたままウレシパにお金を借りに戻ることもあった（第28話）。

そんな体験の繰り返しの中でお金の価値を知り、同じお金であっても価値の大小のあることに気づき、その価値を基準に自分が向かう対象の選択を、より細かに調整するようになってきた。

朝から好きなものを買って、食べて、寝て、とんでもない生活をしているように見られがちだが、そんなタカちゃんが自ら選び取る体験の中から、また一つ新たな行動調整の基準を獲得した訳である。

これは、外から与えられたものではないだけに生活の場での調整に役立ち、更なる価値を増殖する酵母として作用していくに違いないと明日のタカちゃんに期待するのである。

（文責 高橋 渉）

嬉しい気分

ウレシパ日誌 第15話（資料⑩）

平成8年11月27日 水曜日

朝から時々想い出したように降る小雨。そのせいか、気温は高い。孫を保育園に送って、10時頃、のぞみ学園にタカヒロ君を迎えに行った。

今日は、出てくるのが早い。学園の2階の窓から私が来るのを見ていたというのだ。その分、時間もかからず用意ができたというわけだ。

タカヒロ君は、のぞみ学園の内海さんに付き添われて、帽子、外套、カバンと完全装備の出で立ちで現れた。

ジープのそばに立って、私が車のドアを開けるのを待っていたタカヒロ君が、私の頭を軽く押さえキスしてくれた。巨大漢のタカヒロ君だから、私は、その広い懐にしっかりと抱えられる感じとなった。

こんなことは初めてであった。私は、嬉しくなって、

「タカちゃん、ありがとう」

と言って、振り返り、タカちゃんを見上げると、タカちゃんの顔は笑っていた。どちらかという、むすっとした表情で出てくることの多いタカちゃんである。余程、いいことがあったに違いない。

車に乗ったタカヒロ君は、さっさとシートベルトをして、ドアのロックまでする。同乗者としては、最高のマナーなのである。

この日は、ウレシパに向かう車の中でも、助手席から太い腕が伸び、私の頭を抱えるのであった。私もシートベルトをしているので軀幹の動く範囲は限られており、従って、頭は直角に曲げられる。それも信号待ちの停車中に多いのだ。タカヒロ君も、ちゃんと考えているようなのだ。

最近、ウレシパでも、時々、頭にキスされることはあるのだが、車の中というのは珍しい。

帰りの車は、また、小雨が降りだし、フロントガラスが濡れる。時々、ワイパーを回す。その度にタカヒロ君の手が伸びてきて、カチッと、ワイパーのスイッチを回し静かに切るのだ。そのコントロールの効いた指先の動きに感心させられた。かつては、乱暴にワッシャー液を出し困ったことを思い出し、落ち着いたタカヒロ君の様子が、とても嬉しく思われたのであった。

（文責、高橋 渉）

平成9年7月2日 水曜日

いつものように、のぞみ学園に迎えに行った。

夏らしいジャージ姿で表れたタカヒロ君に「おはよう」

と声をかける。耳の悪い私には、はっきりと聞こえないのだが、何か、ぼそつと言っている。「おはよう」と言ったのかもしれない。

タカヒロ君は、非常に正直な方だから自分の気持ちを偽るようなことはしない。金曜日などは、外泊できる日なので表情が、いつもと全く違うのだ。

「タカちゃん、今日は？」

と誘いをかけると、大きな、はっきりした声で、嬉しげな表情で

「おうち、かえる」

と言う。それに比べると、「おはよう」なんていうのは、タカヒロ君の実感に訴えるものがないからなのか、素っ気ない応じ方になるのも致し方のないことなのかも知れない。

今日は、小雨げぶる中、ウレシパへ向かった。フロントガラスが曇る。

「タカちゃん、ワイパーお願い」

と言うと、太い腕が伸びてスイッチをひねってくれる。そして、視野が良好になると、消す。また、ガラスが曇る。

「見えなくなってきた」

と私が呟くと、どうだろう。ワイパーを回してくれる。うん、いいぞ、いいぞと嬉しくなって、調子に乗って、

「見えなくなかった」

と言ったが、やってくれない。それで

「見えなくなかった」

と、先ほどと同じコトバを使う。でも、これもダメ。遂に、

「タカちゃん、お願い」

と言ったが、これもダメ。いよいよ

「タカちゃん、ワイパー、回して」

と最も具体的に言うと、やっと回してくれた。人を試すなんて失礼な奴だと思っていたのかもしれない。曇ってくると、私が黙っているのにやってくれたこともあった。これは、決していたずらではない。視界を良くしようという明確な意図の伺える行動であった。

「タカちゃん、ありがとう」

とお礼を言う。そういうタカヒロ君とのやりとりの中で、私が思わずワイパーを回してしまった。私は、思わず、しまったと思ってタカヒロ君を見ると、なんと笑いを含んだ表情になっている。「何も、自分でやらなくてもいいのに、おかしい奴」と思ったのか、タカヒロ君との一連のやりとりから外れた私の行動が、何かおかしかったのか、すごい笑いだなど、ますます感心させられた。

一年前は、乱暴にワイパーを回していた。私は、「ダメ」とは言わずに、頃合いを見て、

「タカちゃん、ありがとう。もういいよ。」

と言ったりして、ワイパーを動かすのを止められるようにし向けていたりしていた。

当時は、よくパニックも起こしていて、タカヒロ君もあまり落ち着けない状態でもあった。その当時のことを思い起こし、私は、うんと嬉しくなった。

(文責、高橋 渉)

平成9年9月19日 金曜日

朝、のぞみ学園で、タカちゃんを送ってきた看護婦さんが「タカちゃん、今日の外泊、延期です。」

お母さんから連絡がありました」と言うのであった。今日は待ちに待った外泊の日であるだけに、タカちゃんは、この話を敏感に聞き取っていたに違いなかった。

車が動き出すと、

「オウチ、カエル」

と話しかけてきた。いつもだと、「そうだね。今日は、お家に帰れるね」と相づちを打つのだが、今日は、それができない。

「そうね。タカちゃんは、お家好きだもネ」

などと、誤魔化した受け答えをしていた。

午前中も、時々、私どもに向かって、

「オウチ、カエル」

と言っていたが、お昼時になると、早々と、みんなのお弁当を配った。早く、食べる物は食べ、早くお家に帰りたいという気持ちの表れなのかもしれない。みんなが食べ始めたが、タカちゃんは、牛乳パックの切り取った底を握っては、落とす遊びを繰り返して、昼食はとらない。

みんなが食べているところに来たタカちゃんは、私の手を取り、タカちゃんの落下遊びの所に連れて行った。そして、自分の側に座らせたまま、また、遊びを続けた。私が、立うとすると、私の服をつかんで立つなという動作をする。

そして、何度も

「オウチ、カエル」

というのであった。その度に曖昧な受け答えになっていた。タカちゃんは、今朝のこともあって、不安なのだ。その不安を打ち消すように、確実にお家に帰れるようにタカちゃんの送迎をしている私を側に置いて放さないのだ。タカちゃんの胸の内は不安で波立っているのだろう。

お帰りの時刻になってもお母さんとの連絡がとれない。のぞみ学園では、タカちゃんの外泊延期に対応した準備をしているという。

意を決してタカちゃんに「今日は、お家に帰れない」ことを伝えた。それから私の車に乗って、のぞみ学園に帰った。

車から降りたタカちゃんは、のぞみ学園とは、正反対の方向に大股で歩き始めた。私は、その後を小走りに付いていくと、平岸霊園に入った。そして、霊園を抜ける頃は、比較的、ゆったりとした歩調になっていたが、無言のまま、のぞみ学園の玄関に入っていった。

お家に帰れないことを伝えた時からタカちゃんは、1度も、「オウチ カエル」と言わない。そして、怒ったように大股で霊園を廻ってのぞみ学園に戻ったタカちゃんであった。

その行動は、自分を納得させようとするタカちゃんの精一杯の自己調整の姿に思え、その潔さ、健気さに心うたれた。

後日談ではあるが、その日、お母さんからタカちゃんの帰りが遅いのでウレシパに問い合わせがあった。何かの間違いであったのだ。タカちゃんには、いい迷惑な話であったが、タカちゃんの一面に触れた思いであった。

(文責、高橋 渉)

タカちゃん、コックさんになる

ウレシパ日誌 第48話(資料⑬)

平成10年4月7日、火曜日

この日、タカちゃんは、朝、作業所に着くと、すぐにベットに入り、トイレ以外は起きることなく、ほとんど寝て過ごす1日だった。

3時になって、

「タカちゃん、そろそろ帰ろうかあ」

と声をかけると、布団の中から

「カエル」

という返事があって支度をし始めたが、足取りは重く、表情は暗い。タカちゃんを車に乗せ、いつ

もの道をのぞみ学園に向かった。ところが、その途中、助手席にいたタカちゃんの手が伸び、のぞみ学園とは反対の方向へウインカーを上げた。

「あれ！タカちゃん、のぞみへ行くんだよ」

と言うと、

「イカナイ」

との答えである。そこで、私は、タカちゃんの気分転換にと、少しドライブをすることにした。

タカちゃんがウインカーを上げる通りに車を走らせていると、私の家の近くにきてしまった。

「タカちゃん、長瀬さんの家に寄ってく？」

と聞くと、嬉しそうな表情で

「イク」

と応えた。その直後、「ハハハハ・・・」と大きな声で笑い出した。

のぞみ学園に連絡を取り、晩ご飯を食べてから帰ることにした。その電話のやりとりを横で聞いていたタカちゃんは、これまた、笑いが止まらないという様子であった。

タカちゃんは20才の男性。魚よりも肉料理と考え、ザンギを作ることにした。二人で台所に立ち、ごはんの支度を始めた。予め、下味をつけておいた鶏肉に卵、片栗粉、小麦粉をまぶし、サラダ油で揚げる。

この作業のすべては、タカちゃんがやってくれた。揚げ具合も、ちょうど良く、片手で卵をポンと割る姿は、レストランのコックさんのようで、思わず、白い帽子をかぶり、白衣を着たタカちゃんを想像してしまった。

出来上がったザンギとご飯、カップラーメン2つを食べ終わって、7時頃、タカちゃんに、

「のぞみ、行こうかあ」

と言うと、どうでしょう、簡単に、

「イク」

と応え、カバンをもって車に乗った。

車の中でも、終始、ご機嫌。のぞみ学園に着いても、自分からインターホンを押してすんなりと中へ入っていった。

(文責、長瀬美津紀)

ワイパーからウインカーへ

ウレシパ日誌 第43話(資料⑭)

平成10年3月13日 金曜日

以前に、ウレシパ日誌・第27話「ワイパーで結ぶ会話」と題して、高橋渉先生がタカヒロ君とワイパーを仲介にして、いろいろなくやりとり>を書かれたことがある。

最近、のぞみ学園に着いても、お家に着いても「マワル」と言うことが多くなった。タカヒロ君の「マワル」は<ドライブ>を意味している。

車の中でのタカヒロ君は、何か納得いかないというのか、面白くないというのか、不機嫌そうな顔をしている。そういう顔だけなら、まだ、いいのだが、やおら大きな声を出して激しく左頬を叩き出すのだ。もう、止めようとしても止まらない。しばらく続き、血が出たかどうか、掌を見て確認し、やっと終わったと思うと、今度は右頬を激しく叩きだす。

その一連の行動がどうにか終わると、今度はさめざめと泣き出し、辺りにあるタオルやティッシュで涙を拭き、鼻をかむ。その様子は、これほどまでに悲しいことはないといった感じなのである。

それ故、タカヒロ君の「マワル」という言葉が、とても大切な言葉のような気がして、せめて、これくらいはさせてもらおうという気になる。といて、どこを走るということもなく、タカヒロ君の気が納まればいい、気が済めばいい、納得いけばいいという感じでグルッと近くを一周してくるのである。

そんなことを続けているうちに、最近、ウインカーに手を伸ばして方向をはっきり示すようになってきた。単に、乗せられているのは、イヤだと言っているように聞こえてくる。ウインカーを

出すことで私に「右に行きなさい。左に行きなさい」と言って、自分で運転している気分にならなっているのであろうか。

そこには、しっかりと彼の主体性が見て取れる。

もちろん、いつも彼の指示通りに走れるとは限らない。二車線道路の左側を走っているのに「右折シロ」と言われても「そっちには行けない」と応えるしかない。彼は「何デ」と思っているに違いないが、その部分だけは、私の言い分を通してもらっている。

そんなこんなで、今は、「ウインカーお願い」と言うと、左側を走っている時は左に、右側を走っている時には右に出してくれるようになってきた。

また、早くタカヒロ君のこやかな表情を見たいものだが、今、私にできることと言えば、これぐらいしかないのである。

(文責、大谷裕香里)

非常識

ウレシパ日誌 第54話(資料⑬)

平成10年8月28日 金曜日

ラルズのレジでやりとりが始まった。

レジスターには、千二百数十円の表示が出ている。タカヒロ君は、財布の有り金、全部出した。レジのお姉さんが数える。千百数十円しかない。

「タカちゃん、お金が足りないよ。どれか、戻そう」

「イヤダ」

「仕方がない。ウレシパに戻って、お金を借りてこよう」

すると、タカちゃんは、観念したのか、一品を返した。

だが、それでも、2円ほど足りなかった。

「タカちゃん、返すのは、こちらの高い方にしようよ」

と、その品を手にするが、

「イヤダ」

という。この間、後ろにお客さんが待っている。レジのお姉さんは、親切に

「あちらに回ってください」

と案内する。私は、その双方に

「すみません」

とお礼と言っていいか謝ったりもした。

ところが、タカちゃんは、耐えきれなくなったのだろう。品物の入ったカゴを持っていこうと実力行使に出ようとした。

「タカちゃん、それは出来ないよ。では、ウレシパに戻ってお金を借りてこよう」

と、提案した。突然、「ウォーツ」と大きい声をあげて自分の顔を激しく叩き始めた。

私は、タカちゃんに対応しながら

「すみません。これ、後で取りに来ますから」と、レジの方に謝ったが、

「とってはおけません」

と、さっさと片づけられてしまった。タカちゃんは、その後を追うように移動し、泣き叫び、激しく頬を叩いた。

タカちゃんは、巨漢である。私は、タカちゃんを仰ぎ見るようにして、専ら、なだめた。少しして、タカちゃんは私の肩に手をおき、肩を組むようにして店を出た。

私達が近づくと、逃げる人もいた。大勢の方が見ていた。レジのお姉さんを怒らせてしまった。タカちゃんにも、可哀想なことをした。

「大勢の方に迷惑をかけて非常識な」「前もって、お金を確かめておけばいいのに」「余分のお金を用意しておけば、こんなことにはならないのに」「普段の指導がなっていない」等々、非難や批判の声も聞こえてきそうな気がする。

でも、私は、こんな、いわゆる非常識をすることも、とても大事なことはないかと開き直っている。

(文責 高橋 渉)

Sensibility

ウレシパ日誌 第59話(資料⑩)

平成10年11月13日 金曜日

のぞみ学園のインターホーンから

「タカちゃん、お願いします」

と、コールをした後、のぞみ分校の職員室の窓から先生方や子どもたちと、話をしていた。

不意に、私の肩に軽く触る人がいる。私が、振り向くと、タカちゃんが立っていた。これは、珍しい。初めての体験である。従来は、車に乗って待っていることが多く、時には、クラクションを鳴らされたこともあった。

「タカちゃん、早いね。じゃあ、乗ろう」

と、車に乗り、早速、出発した。しばらく行くと、アクセルの踏み込みがおかしい。タカちゃんがギアをニュートラルにしたのだった。

タカちゃんは、機械に興味を持っていて、車のいろいろな部分に触る。ギアの入れ方などは、非常に上手だ。バックなんかも、途中、方向を変えて、きちんと入れる。まあ、見事な手さばきなのである。でも、走行中に手を出すことはなかった。だから、私も、鷹揚に構えて、特に注意もせず走っていた。ところが、引き続き、2~3度、ニュートラルにするのだった。

私も、たまりかねて

「こら！タカ、止めないか」

と、怒鳴ってしまった。恥ずかしいことに、思わず、地が出てしまったというところなのだが、でも、私は、あまり気にも留めずに走っていて、ひょいと、横を向くと、なんと、タカちゃんが、すごく困った顔をしているのだった。

私は、「えっ！」と思った。慌てて、

「タカちゃん、ごめん、ごめん」

と謝った。そして、

「走っている時にいじられると困るんだよ。ね。たかちゃん、ごめんねえ」

と、付け加えた。すると、どうだろう。タカちゃん表情が、すうっと変わるのだった。

はにかんだような、微妙に笑いを含んだような、それでいて、困っているような複雑な表情になった。

私は、思わず、心の中で唸ってしまった。タカちゃんは、すごく微妙な感受性を持った方なんだなあと、改めて、思った。そう言えば、幾つか、思い当たる節がある。

例えば、ラルズで串カツセットを二つ手にした。

「タカちゃん、ちょっと多いんじゃないの」

と言うと、素直に一つを戻した。しかし、午後、外の方と行った時には、やはり串カツセットを買ってきたことがあった。

今、考えると、これに類したことは、よくあったように思う。自分の要求を引っ込める偉いタカちゃんと褒めてきたが、それは、私達のとんだ間違いで、むしろタカちゃんが、私ども大人が敷く状況に敏感で自分から出そうとした芽を引っ込めてしまう、そんな結果に追いやっていた一面があったのではなかったかと反省させられるのである。

タカちゃんの茫洋とした人柄の奥に鋭い感受性が隠されている。

(文責、高橋 渉)